読書をする「孤独な時間」が自分をより豊かに育んでくれる

2024年1月に『東京都同情塔』で
第170回芥川賞を受賞した作家の九段理江さんに、
市議会の印象やさいたま市への思いを聞きました。

日頃から「何を伝えたいのか」を考え
そこに感情を乗せて初めて
言葉は人に伝わります

九段（くだん）理江（りえ）さん

1990年、旧浦和市生まれ。2021年『悪い音楽』で第126回文學界新人賞を受賞しデビュー。2023年、『Schoolgirl』（文藝春秋）で第73回芸術選奨新人賞受賞、『しをかくうま』（文藝春秋）で第45回野間文芸新人賞受賞。2024年、『東京都同情塔』（新潮社）で第170回芥川賞受賞。

学生時代を過ごしたさいたま市は「文学が生まれるまち」

■九段さんは浦和市（現・さいたま市）生まれで、学生時代を過ごされたのですね。

幼少期と、高校から大学の7年間をさいたま市で過ごしました。けっして、真面目な学生ではなかったのですが、図書館が大好きで市内の図書館はすべてめぐったマニアです。高校時代、当時の自宅近くに北図書館ができたことは、それまでの人生で一番うれしい出来事でした。仲の良い高校の司書の先生に「もう私、学校の図書室は利用しないかもしれません」と宣言してしまうくらい、浮かれてしまいました（笑）。最近も、さいたま新都心駅近くに移転した大宮図書館を訪ねて、「この近くに住みたい！」と、周辺地域の物件を探したほどです。

■本日、傍聴いただいた市議会でも、議員から「図書の充実と図書館の環境向上」に向けた一般質問が出されていました。

議員さんの発言で「さいたま市は、図書館数と図書の貸出し数が政令指定都市で一位」と聞いて、私の中にある仮説と合致しました。『Schoolgirl』も芥川賞候補となったのですが、当時の候補者5名のうち3名が埼玉県出身の作家だったんです。記者さんに「なぜ、埼玉県の作家が多いのですか？」とたびたび聞かれて、最初は「偶然でしょう？」と戸惑っていたのですが、考えてみると、ここには文学を育む土壌があるのだと思い至りました。

■新たな文学者や文学作品が生まれる、さいたま市ならではの理由があるのですか？

さいたま市は平和かつ、いい意味で退屈なまちですよね。そして、刺激にあふれた大都会が近くにあります。都会に住む人は、何にでも簡単にアクセスできるので、意外と出不精が多いように思います。でもさいたま市の人には、「自分の力で知見を広げなければ」「ゼロから何かを生み出さなければ」という焦燥感がある。積極性やハングリーな気概が、自然と身につく環境のような気がしますね。そして刺激を浴びた後に、退屈なまちに帰ってくるという、静と動を同居させる、すごくダイナミックな体験を日常的に行っています。青春時代に、賑やかなまちと行き来しながら、静寂や孤独と向き合って、本を読んだり、思考を深めたりした体験が、文学を生み出す力になったのではと思います。

未発表ですが、実は数年前に『アリストテレス・イン・サイタマシティ』という、埼玉県に実在する高校を舞台にした作品も書いたことがあるんです。さいたま市は、文学のタネが至るところに眠っている魅力的なまちです。

市議会で語られる言葉にも感情を乗せて心を動かし、未来を変える対話を

■市議会の印象はどうでしたか？

市議会は、議員や行政の方々が言葉を駆使し、新たな時代を生み出す創造の場だと感じました。ただ、きっちり淡々と話されるせいか、少し「演劇感」がありましたね。誰にでもわかりやすく伝わる言葉を選び、また「炎上」などを避けるには、それが理想状態なのかもしれませんが……。

■市民の皆さんに、市議会にもっと関心を持ってもらうためには、どうしたら良いと思いますか？

『東京都同情塔』の中でも書いたのですが、批判を最小限に留めることを目指すと、言葉が平均化されて、AIの構築する文章に似てきてしまうんです。でも言葉は、感情が乗って初めて人に伝わります。私もその時、自分が感じていることを書くようにしていますが、そのためには、日頃から「何を伝えたいのか」を考え続けることが大事です。言葉は、人の心を動かし、現実や未来を変える力を持っています。市議会でも、もっと言葉に感情を乗せていくことで、市民の方が市政に一層、関心を持ち、未来に向けた対話が進むのではないかと思います。

自分の好きなことを続けて そして本を読む「孤独な時間」を大切に

■数々の作品はどのように生み出されるのでしょうか。

私は、プロットは考えないで、いきなり言葉を書き始めるんです。出てきた言葉につながる言葉が次々と浮かんできて、物語が動き出す感覚です。自分でもどこにたどり着くのかわからない怖さがあります。『東京都同情塔』は、「うまく書いてやろう」という雑念をなくして、今の時代や言葉の力について、本当に自分が思っていることだけを表現した特別な作品です。今は、800年の時を生きる女性の物語を執筆中で、いつも頭の中にその女性がいる状態です。今日も800年後の視点から、「こんな時代もあったな」と懐かしく傍聴していました（笑）。

■さいたま市の未来を担う若い世代の方々に、メッセージをお願いします。

さいたま市民だった頃の私は、閉塞感や未来への不安を抱えた学生でした。でも好きなことを続けていたら、いつか人から「良かったよ」って言ってもらえたり、認めてもらえたりするかもしれない。私にとっては小説でしたが、皆さんも何でもいいので続けてみてください。

そして、どんなジャンルでもいいので、本を読んでみてください。必要な情報が簡単に手に入るネットと違い、本には必要のないノイズがたくさんあります。読書って技術が必要で、苦しいんですよね。でも、苦労して一冊の本を読み通した時間は、いつか必ず自分の身を助けてくれる財産になります。自分に関係ない、役に立たないと思うものほど、与えてくれるものは大きいです。読書をする孤独な時間は、自分をより豊かに育んでくれます。そんな時間を、うっとうしいと思わずに、大切にしてほしいと思っています。

さいたま市は、文学のタネが
至るところに眠っている
魅力的なまちです